

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名(姓、名)	セキ ユン SHI Yun		授与番号 甲 1481 号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日	2021年 3月 31日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]		
博士論文の題名	一七・一八世紀の日本儒学と明清考証学 ——東アジアにおける「共時的」な知的基盤の形成		
審査委員	(主査) 桂島 宣弘 (立命館大学文学部特任教授)	小関 素明 (立命館大学文学部教授)	
	辻本 雅史 (中部大学教授・京都大学名誉教授)		
論文内容の要旨	<p><b>【論文の構成】</b> 本論文は、序論と結論、本論全5章で構成される。各章の概要は以下のとおりである。</p> <p><b>【論文内容の要旨】</b> 序論では、丸山真男・尾藤正英・子安宣邦ら戦後の近世日本思想史研究を代表する研究が概括され、従来の研究では、専ら近世日本の思想家相互の関係を基軸に研究・叙述が進められ、個別思想家と明清思想との関係が言及されることがあっても、それは「線をつなぐ」ものであって思想圏との動態的關係が示されてこなかったとする。本論文は、性理学から復古・考証学へと転回した明清思想史を基軸に据え、17・18世紀日本思想の転回もその趣向に規定されつつ「共時性」を有していたこと、また日本が東アジア思想圏の周辺部にあったことから生じる「時差」によってその特質も生みだされたことを示すことで、その転回過程を把握できるとのべられている。</p> <p>第一章「『大礼議』事件以降の明代思想世界と近世日本儒学の初動」では、まず明代中期に勃興した理学・心学二派の論争及び、その渦中に起った「大礼議」事件の思想史的意義を検討している。「大礼議」事件の核心的人物の一人であった楊慎こそ、明代後期の考証学的儒学への転回を示す象徴的儒者といえるが、この事件以後に楊慎説が大きな影響を与えたことには、この事件が性理学的儒学から復古と考証という明代儒学の転回を画するものになったことが示されている。そして、近世初期の日本が受容した儒学とは、この復古と考証という特質が刻印された明代後期の儒学であったことが、書籍の輸入状況から示され、林家を代表とする17世紀の日本儒者が、楊慎など明代の経学研究の成果を広く受容し、「共時的」な問題意識を共有していくことになることになると主張している。それは、近世初期の日本儒学の実証的な性格の形成に影響を与えたほか、日本古学派の登場を準備するものにもなっていく。</p> <p>第二章「古義堂の学者たちと復古の学」では、古義堂学者らが、朱子学の経書解釈を「憶測・曲解」と批判しえた原動力が明代考証学に由来していることを、『大学』注釈学に即して検討している。伊藤仁斎は、『大学』を「孔子の遺書に非ず」として『大学定本』を作成し、それを受けて伊藤東涯は『大学定本釈義』を著すが、いずれも明代の学説にも依拠していた。次いで伊藤蘭嶠は仁斎の説を批判的に継承し、『大学』を『荀子』の逸篇とし、それを「君主」のためのものとして再定位した。このほか、古義堂学者の『尚書』研究も明代尚</p>		

論 文 内 容 の 要 旨	<p>書研究の影響を受けたものであった。総じて彼らの朱子学批判は、日本の朱子学者に向けてはおらず、宋明朱子学の理論や注釈の是非を問うもので、これは明代後期の考証学者たちの問題意識とも通じ合うものであった。かくて、古義堂学者らの朱子学批判や経書注釈は、最初から宋明思想史の文脈で展開したものであったと結ばれている。</p> <p>第三章「近世的思想空間と学問集団の形成」では、17・18世紀の学者たちの問題意識が「学塾」を媒介に継承・発展していく様相を分析している。とりわけ古義堂では、明清科举制度や朝鮮の教学システムの影響も受けた策問・制義を通じて、『論語』『孟子』に対する理解の共有が図られた。蔭山東門の策問会・制義会に関わる史料を精査すると、仁斎門の重要な特質である文字化・文章化の重視も、こうしたシステムによって育成されたものだったことが分かる。また、荻生徂徠門と同様に仁斎後継門人たちが明代の詩文を重視したことは、共同編纂された『明詩大観』に示されているが、それもこうした「学塾」の共同研究によってなされたものであった。このほか、こうした「学塾」の気風は、紀州や岩国に戻った門人たちの藩政への助言や百姓らの教化活動に伝えられ、やがて19世紀の地方知識人集団・学問社会の形成を準備していくこととなった。</p> <p>第四章「荻生徂徠と一八世紀における儒学『知』の普及」では、徂徠学・古文辞学が文学運動としての明代古文辞学から影響を受けていたことは従来から指摘されてきたものの、より広くは明代儒学の性理学から考証学へという動向を受けたものであったことが主張されている。確かに、徂徠は李攀龍・王世貞よって明代古文辞学を知り、とりわけ後者の史学によって「六経皆史」説と出会ったことは徂徠学の六経学に大きく影響している。だが、『論語微』では楊慎説の頻繁な引用が見られ、さらに徂徠の漢唐以来の説への言及も楊慎書中のものが多い。したがって、徂徠の考証には楊慎ら明代考証学の問題意識と共通していた面が認められる。ただし、徂徠は楊慎批判も行っており、その考証学は、先王説の妥当性を示すという明確な目的の下で行われているという意味では、明・清考証学とやや異なる側面もあったとされる。</p> <p>第五章「『反徂徠』という思想空間と学問世界の明清交替」では、徂徠批判にも明清考証学が大きく影響を与えていることが論じられている。まず高志泉溟や服部蘇門らの「反徂徠」の言説が検討され、彼らはいずれも徂徠学を楊慎からの「剽窃」と捉えていることから、そこに明代学術への深い関心と考証学的精神の共有が認められるとのべられている。さらにこうした基盤の上に、日本思想界においても徂徠学・反徂徠学の論争を超えて、四書学から五経学へという動向が看取されることを、井上金峨、皆川淇園の開物学などを通じて明らかにしている。そこには清の研究も参照されており、やがて18世紀後期になると山本北山、大田錦城らも清朝考証学の影響を受けることとなる。従来は、折衷学派・考証学派などと学派で区分されてきた18世紀後期の学者たちにも、古代儒学に戻帰する傾向が共有されるようになったのであり、そこに明清における古書・古注・古音などに関する研究、考証学の学風が及んでいたと分析されている。</p> <p>結論では、日本思想史と明清思想史の共時的把握により、17・18世紀の中国・日本の学者のなかでは、互いの問題関心や研究成果を共有し、共時的な知的基盤を形成しており、かつ書籍の流布・受容の考察を通じ、日本での「曲折性」「遅延性」によってその特質が生まれたことなどがのべられている。</p>
論 文 審	<p>従来の近世日本思想史像、藤原惺窩、林羅山から古学派（古義学・古文辞学）、18世紀の反徂徠学、折衷学、考証学、正学派朱子学へとつないで結ばれてきた思想史像を、17・18世紀の明清儒学、近世日本儒学の経書注釈書などを詳細に検討することで、明清儒学の動向と</p>

査  
の  
結  
果  
の  
要  
旨

その書籍伝搬による日本思想への影響関係から捉え直し、その像の根本的修正を迫った本論文は画期的意義を有している。とりわけ次の四点において本論文は、近世日本思想史研究（東アジア思想史研究）に新しい地平を切り開いたものと評価できる。

第一に、明代儒学の動向、とりわけ「大札議」事件後の楊慎らによる復古・考証学の台頭という趨勢を前提に、近世日本儒学の展開が決して一国史的枠組みで説明しうるものではなく、藤原惺窩以来既に明代儒学の影響を受けて出発し、さらに古義堂・護園学派もその枠内で胚胎し、とりわけ18世紀にその門人たちが明代後期の考証学の摂取・批判の下で思想展開を図ってきたことを、詳細なテキスト精査に基づいて実証的に明らかにしたことである。東アジア思想圏の中での近世日本思想史研究の新たな可能性を感じさせる大作と評価できる。

第二に、上記の視点に立つことで、これまで伊藤仁斎や荻生徂徠らの「大家」に研究が集中し、第二・第三世代はその「亜流」と捉えられがちであった中で、むしろ伊藤蘭岨や高志泉溟、服部蘇門、皆川淇園、井上金峨、山本北山、大田錦城らこそが、第一世代以上に積極的に明清儒学・考証学の摂取・検証に努め、学派を超えて既に明代後期に開始されていた復古・考証学の思想圏の一翼を担う思想営為を行っていたことを明らかにしたことである。これまで評価が低く、「亜流」扱いされてきた反徂徠学派、折衷学派などに新しい光を当てることができるようになった意義は大きい。

第三に、「学塾」とりわけ古義堂と護園塾での「学び」の具体的様相が、これら学派の学説と密接に関係していることを、かなり具体的に示した点も評価できる。これら「学塾」での共同研究こそが、師説以来の問題意識から、さらには東アジア思想圏での共時的問題意識の共有を可能にしたことが鮮やかに示されたといえる。また、これにより従来から多くの研究蓄積のある仁斎学・徂徠学研究に新しい視点が加わった意義も大きい。

第四に、中国語母語話者である利点を活かし、明代考証学とりわけ明代の『詩経』『易経』『書経』研究に果敢に分け入り、それらのどの部分がどのように近世日本思想家の研究に取り入れられたのかを精査し、それを整理・分析したことも評価できる。今後の明清儒学と近世日本儒学の影響関係を検討する上での基礎的研究となっており、学界にも大きく寄与するものとなっている。合わせて、既に研究が存在するとはいえ、明清代書籍の輸入の様相も考慮されており、「共時的」影響関係以外の「時差」も考慮されている。

以上の達成に加え、ほかに評価できるものとしては以下の点を挙げるができる。第一に、伊藤蘭岨『大学是正』草稿、『読礼記』草稿、『書反正』稿本、蔭山東門「対策文」草稿など、古義堂文庫本を大変丁寧に精査・読解したことである。古義堂系学者の思想を知るためには当然の作業といえるが、仁斎・東涯以外の第二第三世代のテキストを本格的に紹介・分析したことは評価できる。第二に、同様に皆川淇園の易学研究に関わる書籍などを静嘉堂文庫などにおいて調査・読解・分析したこと。これも大変根気のいる作業であり、かつ一般的に淇園開物学が大変難解な著作といわれている中での労を多としたい。第三に、性理学から文献学と併走する形で、四書学から五経学へという動向が東アジア思想圏において共有されていることを示したこと。とりわけ、五経学については、現下の日本思想史研究では未だ端緒についたばかりであり、本論文の公刊によってその研究は大いに進展することが期待される。

本論文の問題点として指摘されたことは以下のとおりである。第一に、本論文のベースには、B. Elman が清朝考証学について論じた『哲学から考証学へ』（“From Philosophy to Philology” Harvard University, 1984）が存在している。明清儒学の趨勢について概ね妥当

	<p>な見解だとしても、重要な問題を Elman の議論に預けている感があることは残念な点であった。また、清末まで中国の儒学界で議論されることになる「大礼議」事件が、明代儒学の分水嶺となったとする議論はやや荒い議論であって、楊慎の位置づけも含めてもう少し丁寧な分析が必要であった。第二に、明清儒学・考証学の影響下で近世日本思想史が展開したことは首肯するにしても、近世日本思想史の文脈、たとえば山崎闇斎学と仁斎学の対抗、仁斎への徂徠の対抗なども無視しえない事実であって、このような対抗が思想の展開をもたらした側面もある。対外的契機に加えて、こうした近世日本内の思想的格闘にも目を向けるべきではなかったか。第三に、第二点の問題とも関わるが、明清と政治社会体制が異なる近世日本において、何故儒者たちは、明清儒学と格闘する必要があったのか。そもそも近世日本において儒学とは何だったのか、この大きな課題に正面から向き合うことで、本論文は一段と輝くものになるのではないか。</p> <p>以上の問題点・課題が残るものの、本論文はまさしく申請者が一生取り組みうる壮大なテーマの現段階での一つの集約ともいえるもので、方法論や実証性の面でも、きわめて高いレベルにある論文と評価できる。日本語の完成度も高く、中国語を母語とする留学生の論文としてはきわめて優れたものといわなければならない。直ちに公刊すべき内容であるというのが、審査委員の一致した見解であった。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公開審査は 2020 年 12 月 21 日（月）午前 10 時から 12 時まで、清心館 008 教室で行われた。審査委員会は、本論文がきわめて優秀なもので、十分な独創性・体系性、高い水準の学術的価値をもつものとの結論に至った。本論文の叙述、引用史料および提出された英文要旨から、中国語を母語とする申請者の中国語（古文）・日本語（現代語・江戸語・古文書）・英語の卓越した水準の力量も窺える。審査委員会はまた、本論文の主要分野である日本近世思想史および東アジア近世思想史・東アジア国際関係史について、申請者の歴史的事項に関わる知識、主要な研究とその史学史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。</p> <p>加えて、申請者は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中に発表した査読付を含む 5 本の学術論文、数多くの国際学会・研究会での報告などで、すでに東アジアの学界において若手研究者としての地位を確立している。日本学術振興会特別研究員（DC1）に採用され、熱心に研究活動を行ったことも評価できる。</p> <p>以上から、審査委員会は申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>